

高校生が先端技術体験

加藤組
導入 無人シヨベルを遠隔操作

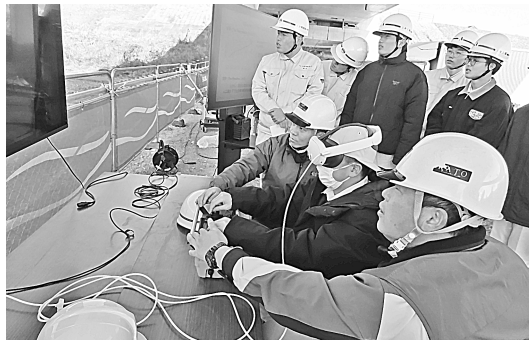
三次河川国道

デジタル技術を活用し、に日立建機製の遠隔操作で動く油圧シヨベル「Z200A-7」(20tクラス)を購入し、今回の会場となった現場に導入。日立建機日本による施工中の「令和6年度江の川上流十日市地区掘削外工事」の現場で14日、ICT建機の体験会が開かれた。県立三次青陵高校(同市大田幸町)の総合学科・機械系列2年生12人が参加し、土木の最先端技術に触れた。

工事を発注した中国地方整備局三次河川国道事務所が主催し、施工を担当する加藤組(三次市十日市東、加藤修司社長)が協力。同社では、昨年8月

建設業を将来の選択肢として考えてもらいたいと体験会を企画した。

体験会では、はじめに三次河川国道事務所吉田流域治水出張所の中土正



無人シヨベルの操作体験



参加者全員で記念撮影

之所长がインフラDXに受けながら、VR(仮想現実)ゴーグルを着けての取り組みや「推進計画2025」のポイントなど映像を使って分かりやすく説明を行った。

このあと、生徒たちは河川敷に設置された無人シヨベルの遠隔操作に挑戦。一人ひとり順番に加藤組の担当者から指導を

受けたら、VR(仮想現実)ゴーグルを着けてRBTリモコン(無人ロボットコントローラー)を操作し、アームを伸ばしてバケットで土砂をすく、指定された位置に旋回して排土する一連の作業を体験した。

生徒からは「想像していたのとまったく違い、指定された位置に旋回して排土する一連の作業を体験した。」などといった感想が聞かれた。

体験会を終え、三次河川国道事務所の河村昭副所長は「素晴らしい土木技術体験し、土木の魅力が伝わっていただうれし。生徒たちには探求心を持ち続けながら、人手不足が深刻な建設業界を担う人材になってほしい」と期待を寄せた。

工事の指揮をとる加藤組の花園亮二作業所長も「今までデジタルの中でしか感じられなかったことを肌で感じ、建設業界に興味を持ってもらえた」と話した。